

▼ Kさん

「フクシマの後で」を読んだ感想 2

改めて読んでみても、遠いところから見ているみたいだなあ、此方で見ていて感じることと比べてみて、ちょっと違うなあ、という違和感が残っています。

同じ震災や原発事故を見て、そうした災害や事故を前にして行動する人や集団の様子を見て、それについて言及しているはずなのに、著者の語る言葉は、捉えにくく、解釈しにくく、理解しにくい部分が多い、という感じがします。私が感じる実感や、私の周囲の人間が語る言葉と比較して、異質、という感じがします。

人間、又は、個人が集まって集団や組織を作るときの秩序の形成の仕方や、其の秩序の裏づけとなる道徳観とか倫理観とか物事の見方とか組織運営の技術といったことについて、著者と私や私が見知っている人間や集団との間に大きな違いがあるのではないかと感じています。私が見知っている日本の人間や集団が秩序を作るときのやり方や考え方、在り様が、著者や著者の見知っているフランスかヨーロッパか欧米かの人間や集団が秩序を作るときのやり方や考え方や在り様とが大きく異なっているのではないかと感じています。そして、著者や著者の見知っているフランスかヨーロッパか欧米かの人間や集団が秩序を作るときのやり方や考え方で、それとは異質な日本の人間や集団が秩序を作るときのやり方や在り様を解釈し記述しているために、私に何か違和感を感じさせる記述になっているのではないかと、考えています。

私が理解するところでは、著者は、福島での原発事故を通じて現代社会のありよう、巨大な破局に至りかねない現代社会のありよう、技術も含めシステムが巨大化していくありようについて批判し、別のありようを模索すべきであり、そうしたシステムの巨大化を可能にしている要因として一般的等価性という原則が社会を覆っていることにある、と主張しているように見えます。

著者は、一般的等価性の原則というのは、「あらゆる生産物や生産力は等価であり、交換可能で転換可能であるという形で規定される価値へ、一切の価値が全般的に吸収されるという原則」と、著者は紹介する。また、マルクスが貨幣を「一般等価物」と呼ぶことがあり、貨幣技術は、全般的な相互連関、等価性、計算不可能性といった特徴を併せ持つ技術である、と紹介します。

著者は一般的等価性という原則で福島での原発事故の背景にある現代社会の在り様を解釈しようとしています。しかし、私は、福島での原発事故の背景にある現代社会の在り様を解釈しようとするなら、一般的等価性という原則が成立している領域と成立していない領域とを分け、成立していない領域にも着目して解釈した方がより良い解釈に為るのではないかと、考えています。一般的等価性という原則が成立している領域と成立していない領域、という区分に加え、成立させた方が良い領域と成立させない方が良い領域、という区分を加えて、現代社会の在り様を解釈しようとする方が良いのではないかと、感じています。

私が経験したり見たり聞いたりした社会または世間は、一般的等価性という原則が成立している領域があるが、成立していない領域もある、と、感じています。私も、社会や世間において、幾つかの集団や共同体における人の動き方、人を動かすときのやり方、物事の進め方、その結果としての成果、そういった物事を見てきました。見てきた物事から、プロジェクトの失敗やプロジェクト遂行中の事故を思い出すと、一般的等価性という原則が成立していないが故の結果として解釈したほうが良いと思える部分が多くあります。そうしたプロジェクトの失敗やプロジェクト遂行中の事故と、福島での原発事故に関連した報道や解説とを比較して見ると、福島での原発事故や背景にある現代社会の在り様も、一般的等価性という原則が成立していない領域にも着目して解釈しようとした方が良い、と、感じています。一般的等価性という原則が成立していることに着目して解釈する事が有効、と感じる領域も有りますが。

社会を組織化し、巨大なシステムを実現し、運用することを可能にする上において、数多の人間を集め、彼らの様々な力を特定の目的に向かって束ね、動かす、ということが必要になります。目的を果たすために、目的にあわせた設定した目標に対して、より合目的に、より有効に、より効率的に、人・物・金・情報・知識・技術などを配置し運用する必要が発生すると思います。そう考えると、一般等価性の原則が集結した人間に共有されていることや、貨幣という一般等価物が運用される技術が必要であるということは、理解できますし、納得できます。

日本国は、国民は、其の集団の内に、原子力産業を持ったし、原子力発電所を建設する力を持つほどになっています。原子力産業や国という数多の人間の参加する集団が形成され働き、原子力発電所という巨大で複雑で繊細な技術的装置が実現され機能しています。日本には、原子力発電所や原子力産業に限らず、巨大なエネルギーシステムや、交通システム、通信システムなどがあり、政府や大企業のような集団が成立して経済的に繁栄しています。こうしたことを見れば、日本において人々がそれなりに組織化していることの証拠であるし、集団が一般等価性の原則を共有し、一般等価物を運用する技術を持っていることの証拠であると思います。

だから、著者が一般等価性の原則や一般等価物という考え方を適用して福島での原発事故や背景にある現代社会の在り様を批評しようとしたことには、納得できます。

納得できない部分もあります。

私が経験したり見たり聞いたりした社会または世間における集団や共同体というものは、目的が明確化されなかつたり共有されなかつたり、目的を実現するための目標が具体的になく曖昧だつたり共有できなかつたり、集団や共同体の中のルールが曖昧だつたり恣意的に運用されたり有力者の気分や思いつきだつたり、指揮命令系が無かつたり複数あつたり、といった状態であることが殆どでした。集団や共同体ではあるものの、組織ではない、という印象を持つことが殆どでした。

また、集団や共同体内部での 1 対 1 の人間対人間の関係では、上の立場の人間を下の方の立場の人間が察して、上の人間が意するところを言われる前に察して動いて、上の人間の意を満足させる、更には、上の人間が意する前に、上の人間の意が不満にならないように

する、下の人間は上の人間の意と異なるような言動をしない、意を持たない、それが暗黙の了解と感ずることが多くありました。集団内で言葉が邪魔になっている、知識が邪魔になっている、個人という在り様が邪魔になっている、と感ずることが多くありました。

こうした集団や共同体では、誰が何をどうやっているか確認したり、物事の情報や知識を交換したり、知識や価値観や目標や目的を具体的に表明し合ったり、知識や価値観や目標や目的の妥当性を互いに検証したり、検証した知識や価値観や目標や目的を共有したり、そういったことを言葉という表現形式で行うことは相当に難しいと考えます。集団や共同体の中で、構成員が互いに非常に長い時間を共有して、非常に多くの体験を共有して、そのなかで、構成員がそれぞれの内にそれぞれに形成していく、という事は可能、とは思いますが。また、構成員がそれぞれの内にそれぞれに異なる知識や価値観や目標や目的を形成したとしても、安定した関係の中で長い期間を過ごすうちに、同じ知識や価値観や目標や目的を共有していると錯覚して安心することが可能になる、とも思いますが。

しかし、構成員が互いに非常に長い時間を共有する事も、非常に多くの体験を共有する事もできない集団にあつては、構成員が知識や価値観や目標や目的を共有するには、言葉を以ってして行うしか方法がありません。短期のプロジェクトを遂行するために集められた人間の集団や、誰も予想も経験もしなかつたような大災害や大事故で構成員のそれぞれがそれぞれにそれまでと全く異なる物事を多く経験し、かつ、それまでの安定した関係が破壊されてしまった集団、というのが知識や価値観や目標や目的を共有できていない集団の例だと思います。

そして、残念なことに、物事の情報や知識を交換したり、知識や価値観や目標や目的を具体的に表明し合ったり、知識や価値観や目標や目的の妥当性を互いに検証したり、検証した知識や価値観や目標や目的を共有したり、そういったことを言葉という表現形式で行うことについて、考えられる人、慣れている人、訓練されている人、技術を持っている人は多くないように感じます。また、構成員に知識や価値観や目標や目的を表明させ、妥当性を互いに検証させ、共有させて、構成員を組織化させられている集団や共同体も少ない、と感じています。

あるプロジェクトで、プロジェクト内で知識や価値観や目標や目的を具体的にさせられず、共有できていない状態だつたところがありました。そこでは、プロジェクトを成功させるためにはどのような成果が必要で、その成果を得るためにどのような人が必要か明らかにせず、適切な人選を行えず、選んでもその構成員にプロジェクトが求めている成果を説明したり、仕事を適切に割り振ることができず、選ばれた構成員が動けない、成果を出せない、能力が遊休している、ということがありました。また、構成員がやっていることがプロジェクトを成功させるために有効か否か効率的な否か評価も判断もできない、ということもありました。自己主張の強い構成員が自分の好きなように物事を進めて何かの成果を出す一方、何をすべきかわからず右往左往するだけで空回りして徒労感で自信を無くして心身を病むなどしてプロジェクトを去る構成員もいました。さらに、ある構成員が去ると、その構成員が何をどうやっていたのか誰にも判らなくなり、成果が失われ、補充された後任の構成員が最初から成果を構築しなおしてました。後任が再度の構築を進め

る過程で、前任者の成果を再発見して後任の仕事に必要なが無かったことが判明した、といったこともありました。プロジェクトの結果について、後から聞いたところによると、プロジェクトの規模からすると非常に少ない成果しか得られなかったようです。一つにまとまった大きい成果は無く、個別バラバラの細かい成果が幾つか並んだだけだったようです。

また、あるプロジェクトでは、技術力に自信を持って製品を開発しようとプロジェクトを開始し、しかし、具体的にどの顧客にどのような便益をもたらすかについて明確に設定できないままに進行させてしまい、当然のように開発が迷走し、それでも形あるモノを作り上げたものの、作ったモノを売り込む先を見出せず、結局投下した資金を回収できなかった、ということがありました。

ある職場では、誰に何の責任や権限があるか不明で、それぞれがそれぞれに事に当たっていて、集団内で体系的な整理がなされていないために、一度決まったはずのことが、後から、よくわからない経緯で予想外の方面から横槍が入って決定が覆される、ひどいときには仕事が完成に近くなったところでひっくり返されてそれまでの仕事が無に帰して失敗する、といった様子もよく目にしました。私も、そこでは、誰が、どこで、どのように、何を行っているか見通しを得られず、それまで経験の無い新しい物事を初めて成功させることに期待を見いだせなくなったり、新しい物事を始めることに危険や不安を感じたり、仕事に対して消極的になったり、そういった経験をしました。

福島第一原発での事故に関して、その対応についての報道で、首相が電源車の手配状況を自分に逐一報告させたとか、自身でバッテリーの寸法・重量や輸送方法方法を確認したとか、ヘリコプターで福島第一原発に直接乗り込んで発電所の所長に対応させたとか、東京電力本店に乗り込んで東京電力の幹部に怒鳴っていたとか、そういう報道や解説を目にし、耳にしました。福島第一原発での事故の後には、各電力会社が経済産業省原子力安全・保安院の指導の下に緊急安全対策を実施して海江田経産相が安全宣言を行ったという報道があったかと思うと、1ヶ月も経たずに菅総理から原発の再稼働にはストレステストが必要という発言が報道され、原発の点検後の再稼働が難しくなって次々と原発が停止しているという状況になりました。そして、原発停止と電力不足に伴う計画停電や節電や産業界の生産調整の騒動や電力料金値上げという形で、結果が私たちの生活に現れました。

こうした動きを見ていると、内閣といった政府という大所帯の頂点にあるような集団についても、私が社会や世間において見てきた幾つかの集団や共同体における人の動き方、人を動かすときのやり方、物事の進め方、その結果としての成果、それに良く似ている、と、感じています。目的も目標も人々の間に共有されず、誰に何の責任があるのか、その責任に対して何の権限があるのか、誰が誰に何を目的に責任や権限を与えるのか、そういうことが曖昧になっていて、曖昧なままに物事が混乱し、混乱のままに何となく推移して行く、そういった姿に見えます。集団や共同体の内部において、人が組織化されて動いている、とは到底思えませんでした。

目的や目標が曖昧な場では、物事を評価する価値観は形成されませんし、或いは、価値観が共有されることはありませんし、人々や物事を評価することは出来ませんし、評価できなければ判断の基準も設定できません。評価できず、判断の基準も設定できないところ

では、人や物事を評価したり判断することはできませんし、人や物事が等価か否かの判断はできませんし、人や物事を交換することが可能か否かの判断はできませんし、人や物事を転換することが可能か否かの判断はできません。

当然、目的を果たすために、目的にあわせた設定した目標に対して、人・物・金・情報・知識・技術などを配置し運用しようとしても、より合目的か否か、より有効か否か、より効率的であるか否か判断する、ということができません。巨大なシステムを実現し、運用する、そのために数多の人間を集めて集団を形成し、集った人々の様々な力を特定の目的に向かって束ね、集団を組織化し、動かす、ということは非常に困難です。

そう考えると、私が社会や世間において見てきた、幾つかの集団や共同体におけるプロジェクトの失敗やプロジェクト遂行中の事故は不思議でもなんでもありません。福島原発の事故や、事故後の混乱も、同様です。

こうしたことから、私は、私が社会や世間において見てきた、幾つかの集団や共同体においては、一部の領域においては、一般等価性の原則は成立していない、と考えています。人や物事が等価か否かの判断をできないところでは、人や物事の交換や転換がうまくいかずに失敗する可能性が高く、実質的に交換や転換ができないのであれば、人や物事は等価ではなく、一般等価性の原則は成立しない、と考えています。集団や共同体の内部において、一般的等価性という原則が成立していないが故に、プロジェクトの失敗やプロジェクト遂行中の事故という結果がもたらされることが多くある、と解釈したほうが良いと考えています。

貨幣という一般等価物についても同様で、うまく運用されていない、と考えています。評価できず、判断の基準も設定できないところでは、人や物事を評価したり判断することは出来ず、等価か否かの判断はできませんし、交換可能か否かは判断できませんし、転換可能か否かは判断できませんので、貨幣を行使した等価な交換がうまくいくとは思えません。

私は、このように考え、著者が行っている一般的等価性という原則で福島での原発事故の背景にある現代社会の在り様を解釈しようとする試みには、適用できる範囲に限界がある、という考えにいたりました。そして、私は、福島での原発事故の背景にある現代社会の在り様を解釈しようとするなら、一般的等価性という原則が成立している領域と成立していない領域とを分け、成立していない領域にも着目して解釈した方がより良い解釈になる、と考えます。

加えて、著者が一般的等価性という原則が成立している領域を前提に、一般的等価性という原則の限界や、そこから抜け出すことについて言及しているように、私も、一般的等価性という原則が成立していない領域があることを前提に、その領域に一般的等価性という原則を浸透させることを考えて良いと思っています。そして、一般的等価性という原則が成立している領域と成立していない領域という区分、一般的等価性という原則を成立させた方が良い領域と成立させない方が良い領域という区分で、現代社会の在り様を解釈するとより面白いのではないかと、考えています。